

劇団SCOT×レスツ・クスマニングルム(インドネシア)『エレクトラ』第1回報告書〈事業の立ち上げ〉内野儀

本プロジェクトは、新型コロナウイルス感染症の世界的まん延のために、実施が困難になるのではないかと当初、危惧された。本来は、2021年夏に開かれるSCOTサマー・シーズンにおいて上演予定であったが、周知の状況により、スケジュール的に不可能になった。しかしながら、日本側のSCOTとインドネシア側のプロデューサーレスツ・クスマニングルム氏およびプルナティ(Purnati)¹の関係者の方々の、プロフェッショナルに徹した冷静な対応と、単なる国際交流にとどまらない本プロジェクトの芸術的、あるいは芸術史的重要性への深い理解によって、11月27日に予定されている富山県南砺市利賀村、利賀芸術公園内の利賀大山房における上演に向け、現在、順調にその準備が進んでいる。両サイドをまじえた第1回の打ち合わせ会は、10月22日にZoomを利用した遠隔で行われたが、その時点で、インドネシア側の俳優たちはすでに来日を果たし、上演予定地でSCOTの本拠地である利賀村にすでに入り、自己隔離中ということであった。

以下、その打ち合わせ会でインドネシア側(レスツ氏による)が行ったプレゼンテーションの概要を主として英語からの日本語訳で示し(日本語訳は筆者が行った)、途中のコメントを挟みながら、現時点での感想を記す。

第1回打ち合わせ会(Zoom利用)
2021年10月22日14時～15時
参加者：重政良恵(SCOT制作)、レスツ・クスマニングルム(プロデューサー、シンガポール²)、ウィウィット・ロスウィタ(プルナティ・マネージャー、ジャカルタ)、アナック・アグン・イスワラ(通訳、バリ)、内野儀(オプゼーパー)

いわゆるコロナ禍にあって、さまざまな困難にみまわれた本プロジェクトであるが、ようやくインドネシア側の俳優の来日がかない、11月27日の本公演に向けてのめどが立ったところで、筆者に対する、最初のプロジェクトの説明会的な会合が、日本とインドネシアとシンガポールをZoomでつなぐかたちで行われた。

最初、SCOTの重政氏からプロジェクトの概要と当日の趣旨が述べられ、引き続き、プロデューサーのレスツ氏より、本プロジェクトの概要についての30分を超えるプレゼンテーションがあった。ここからはそのプレゼンテーションの概要を説明する。

インドネシア側から今回のプロジェクトに参加しているのは以下の12名である。
ジャマルディン・ラティフ(俳優、ジョグジャカルタ)
ディアン・ノヴァ・サブトラ(俳優、トレンガレク)
ワシャディ(俳優、ジャカルタ/プレベス)
エリック・ノフリワンディ(俳優、バダンパンジャン)
ワヒュ・クルニア(俳優、ロンボク)
アフマッド・リドワン・ファジリ(俳優、バダンパンジャン)
アンディニ・プトゥリ・レスタリ(女性俳優、ジャカルタ)
バンバン・プリハディ(訓練担当/俳優、ジャカルタ)
アガタ・イレナ・プラディティヤ(女性俳優、ジョグジャカルタ)
アナック・アグン・イスワラ(通訳、バリ)
ウィウィット・ロスウィタ(制作、ジャカルタ)
レスツ・クスマニングルム(プロデューサー、シンガポール)

1. プルナティにおけるインテンシヴ・トレーニング
2021年4月10日～24日
15名の俳優/パフォーマーをジャカルタに招聘して実施
目的：身体表現のポキャブラリーを豊かにすること『エレクトラ』出演候補の俳優を見出すこと
プログラム内容：
・インドネシア大学から講師を招聘してジャワ島文化の専門家によるジャワ舞踊を通した哲学についての講義
・五感を有機的に関連させるためのアチェ舞踊「サマン」
・西スマトラのマーシャルアーツ
・南スラウェシのパカレナ舞踊の柔らかな動き
・女性/男性バリ舞踊の基本
・スズキ・トレーニング・メソッドの紹介
・それぞれの母語によるテキスト朗読を通した声の訓練
・SCOT、およびインドネシアや国際的な舞台芸術の舞台映像の視聴
・プロの俳優、演出家、書き手を招聘しての交流

2. 『エレクトラ』オーディション
2021年4月22日
15名の俳優が参加し、以下の6名が選ばれる
1. ワシャディ(『ディオニュソス』出演³)
2. エリック・ノフリワンディ
3. ワヒュ・クルニア
4. アフマッド・リドワン・ファジリ
5. アンディニ・プトゥリ・レスタリ
6. アガタ・イレナ・プラディティヤ
その他、インドネシア版『ディオニュソス』に参加した以下3名も招聘された
7. ジャマルディン・ラティフ
8. ディアン・ノヴァ・サブトラ
9. バンバン・プリハディ
以上、9名が『エレクトラ』出演内定

3. 選抜された俳優のためのトレーニングプログラム
a. 5月～6月
レスツ氏と定期的にZoomでミーティング
SCOT舞台映像記録を視聴
プロ・アートスペースにおいて毎週水・土曜日、スズキ・トレーニング・メソッドのトレーニング
(参加者：ワシャディ、アンディニ、サラ、Zoom経由でアガタ、エリック、リドワン、ワヒュ)
b. 7月ートレーニング
プロ・アートスペースにおいて毎週月曜から土曜まで、スズキ・トレーニング・メソッドのトレーニング
7時～8時
午前のセッション/16時～17時
午後のセッション
(参加者：ワシャディ、アンディニ、エリック、リドワン)
スタジオにて瞑想とテキスト朗読(インドネシア語、ジャンバン・ファームिंग・スタジオ)
c. 7月ー俳優
エリックとリドワン(バダンパンジャン、西スマトラ)が6月30日空路でジャカルタへ(火曜～木曜日)
プロ・アートスペースのプルナティ事務所で事務作業(金曜～月曜日)
身体強化のための戸外活動〔農業、園芸、漁業およびジャンバン・ファームिंग・スタジオのリノベーション(塗装、料理、野外劇場の建築)〕
d. 8月
アガタ(ジョグジャカルタ)が鉄道でジャカルタへ
ワヒュ(ロンボク、西ヌサトゥンガラ)が空路でバリへ
スズキ・トレーニング・メソッドのトレーニング(レスツが指導、バリ・プルナティ)、その後8月1日空路でジャカルタへ
ジャマルディンとディアン・ノヴァをのぞく全員が8月2日に集結

『エレクトラ』のためのトレーニング・スケジュール

・8月2日～25日
プロ・アートスペースにおいてスズキ・トレーニング・メソッドのトレーニング
月曜～土曜日
7時～8時
午前のセッション/16時～17時
午後のセッション
水曜日と木曜日はバンバンによるトレーニング
『エレクトラ』ビデオ映像視聴
〈スズキ・トレーニング・メソッドの集中訓練〉
・8月26日～9月5日
ジャカルタから1時間半の距離にあるジャンバン・ファームिंग・スタジオでの検疫/隔離
参加俳優：エレクトラチーム(エリック、ワヒュ、リドワン、アンディニ、アガタ)、5名の「ディオニュソス」参加者(アンディティア、アンワリ、デクサラ、サラ、ワシャディ)+ジャワ島およびスマトラ島から招聘された新しい5名の俳優
バンバンが指導員、ワシャディが補助指導員
新しい俳優たちへのスズキ・トレーニング・メソッドの紹介、『エレクトラ』および『ディオニュソス』参加メンバーのためのトレーニング
・9月1日～10月10日
ジャマルディンとディアン・ノヴァが空路でジャカルタへ
検疫：ジャンバン・ファームिंग・スタジオで(ジャカルタ郊外)
9月13日より、利賀プログラムの準備開始
・9月13日～10月3日
ジャンバン・ファームING・スタジオにおいてスズキ・トレーニング・メソッドのトレーニング
『エレクトラ』の台本(インドネシア語と4つの現地語)の本読み
車椅子の訓練
日曜～金曜日
10時～12時
午前のセッション
14時～16時
午後のセッション
18時30分～20時30分
夜のセッション
バンバンが指導、ディアン・ノヴァとワシャディが補助

出発準備
10月5日～11日
10月5日
プロ・アートスペース(ジャカルタ)に移動
10月6～8日
従来のトレーニング
10月9日
日系医療機関においてPCR検査
10月11日
日本に向け出発

健康面への配慮について

・新型コロナウイルス
2度のワクチン接種完了
トレーニング参加前にPCR検査と抗原検査を実施
プルナティのスタッフとともに毎週、抗原検査実施
感染予防策：マスク着用、手洗い実施、社会的距離
・検疫について
検疫(消毒)システム：プルナティの諸施設
8月2日から
プロ・アートスペース、ジャンバン・ファームING・スタジオ、バリ・プルナティアートセンター

8月の新型コロナウイルスにかかる制限措置により、全俳優はジャカルタから1時間半の距離にあるジャンバン・ファームING・スタジオに強制的に移動

『エレクトラ』キャストイング決定のプロセスについて

1. 4月22日にジャカルタでオーディションを行い、その映像を収録。
2. その映像とレスツ氏のコメントを送ってもらい、SCOTで検討。
3. その結果をレスツ氏に伝え、協議して、出演俳優を決定。
4. なお、最終的なキャストイングについては、利賀での稽古が始まってから、鈴木氏が決定した(この部分は重政氏の情報による)。

プレゼンテーションを聞いて

コロナ禍にあるため、筆者は現場に立ち会うことがまだできていない状態ではあるが、本レポートで取り上げた第1回打ち合わせ会で、本プロジェクトが、さまざまな困難を乗り越えて、きわめて順調に進んでいることが理解できた。プロデューサーのレスツ氏とは、たしか2015年の初春に初めて利賀村でお会いしたと思う。鈴木忠志氏が世界的な演出家であることに異論を挟む者は誰もいないだろうが、ただ単に、そうした鈴木氏の作品を高く評価するだけのプロデューサーというのではなく、レスツ氏の出身地であるインドネシアの舞台芸術の現代化・活性化になんとか貢献したいという思いから、鈴木氏にインドネシアとの国際共同制作の舞台演出を依頼するための来日であった記憶である。もちろん、そのような申し出は多数あり、そのすべてに応えるわけにはいかないだろうが、鈴木氏はレスツ氏の申し出を受けいれることになり、その後、時間をかけてゆっくりと関係を構築していった。その結果として上演されたのが鈴木氏の代表作の一つである『ディオニュソス』である。すでに記したように、2018年8月から9月にかけて、SCOTサマー・シーズンのなかで上演された。

この演出では、本作のカドモス役とコロスをインドネシア人俳優が演じるようになっていた。利賀芸術公園利賀大山房での初演後、インドネシアのプランバナン寺院群の特設野外劇場でも上演。翌年の「第9回シアター・オリンピックス」においては、富山県黒部市の前沢ガーデンと利賀芸術公園の野外劇場で再演されることになった。

鈴木氏の代表作である『ディオニュソス』は、20か国以上で上演されているだけでなく、多彩な俳優たちによる上演でも知られてきた。そして今回、上演されてきたヴァージョンでは、コロスを演じるインドネシア人俳優がそれぞれの方言で話すことが大きな特徴となっていた。元々身体能力が高い俳優たちが、スズキ・トレーニング・メソッドのトレーニングを経験することで、さらにその俳優としてのポテンシャルを高め、異なる音/言語＝異なる文化に属する者が、宗教的熱狂において集団化して大衆を扇動するというイメージを見事に演じていたことが、何より印象的だった。

今回の『エレクトラ』では、さらに、インドネシア人俳優の存在が重要になることが、キャストイングからも予想される。次回の報告書では、本番1週間前の利賀村において、リハーサルに立ち会い、可能であれば、俳優たちにインタビューすることとしたい。

- プルナティは、レスツ氏が主宰する芸術プロデュース機関で、バリとジャカルタに滞在型の稽古場、劇場等の施設を擁する。演劇だけではなく、ダンス、音楽、美術など幅広い分野の芸術を対象にしている(重政氏からの情報による)。
- プロデューサーのレスツ氏はインドネシアに拠点がありながら、シンガポールと往復もしている。『エレクトラ』のオーディション、稽古の期間もほとんどインドネシア(バリ、またはジャカルタ)に滞在し、今回のプロジェクトの企画・運営、俳優たちの指導に当たった。俳優たちが日本に来る直前にシンガポールに行ったため、10月22日のZoomミーティングはシンガポールからの参加になった(この部分は重政氏からの情報による)。他の参加者はインドネシア在住であるが、ジャカルタやジョグジャカルタといったよく知られた都市在住とはかぎらない。
- インドネシアの俳優とSCOTのコラボレーションは今回が2度目である。最初は3年間をかけた『ディオニュソス』の上演であり、インドネシアから俳優を迎えた本作は2018年8月から9月にかけて利賀芸術公園(利賀大山房)で、さらに9月末には、インドネシアのプランバナン寺院群内で上演された。後述するが、3年という長い時間をかけた共同作業であり、そこで築かれたインドネシア側との信頼関係が、コロナ禍における今回のプロジェクトを可能にしていると考えられてよい。

劇団SCOT×レスツ・クスマニングルム(インドネシア)

『エレクトラ』第2回報告書〈稽古〉

内野儀

第1回報告書でも書いたように、本プロジェクトは、新型コロナウイルスの世界的まん延のために、実施が困難になるのではないかと当初、危惧されたものであった。事前の上演スケジュールでの実施は不可能になったものの、2021年11月27日に予定されていた富山県南砺市利賀村、利賀芸術公園内の利賀大山房における上演に向けて、速度を上げて、動きはじめることになった。また、第1回報告書で取り上げた、両サイドをまじえた第1回の打ち合わせ会は、10月22日にZoomを利用した遠隔で行われたが、その時点で、インドネシア側の俳優たちはすでに来日を果たし(10月11日)、上演予定地でSCOTの本拠地である利賀村に入り、自己隔離中ということであった。

国際共同制作作品『エレクトラ』は、恵まれた施設を持つ利賀芸術公園での稽古と上演ということであるので、インドネシアから来日したメンバーたちが自己隔離をすることが可能な施設もあった。そのため、来日した11名は、特に問題なく自己隔離期間(14日間)を利賀村の施設内で過ごし、10月26日から『エレクトラ』のリハーサルが開始された。

筆者は、公演を9日後に控えた11月18日の午後から翌19日午前にかけて利賀村に滞在した。到着後、18日の午後には『エレクトラ』の通し稽古を見学し、その後、俳優3名にインタビューをする機会を得た。さらに、夜は、『エレクトラ』と同時に上演が予定されている『新版・津軽海峡冬景色』の通し稽古を見学した。翌19日の午前中は、インドネシア人俳優によるスズキ・トレーニング・メソッドのトレーニング、引き続き、『エレクトラ』の自主稽古の一部に立ち会うことができた。

18日午後行われたインタビューに応じてくれたのは、『エレクトラ』で演出助手を務め、医者役を演じるバンバン・プリハディ氏、エレクトラを演じるアンディニ・プトゥリ・レスタリ氏、オレステスを演じるジャマルディン・ラティフ氏である。インタビューはインドネシア語で行われた。通訳はアナック・アゲン・イスワラ氏で、制作のウィウィット・ロスウィタ氏とSCOTの重政良恵氏も立ち会った。以下、インタビューの内容をまとめておく。

バンバン氏はインドネシアで自身の劇団を持つアーティストだが、2015年、国際交流基金のプログラムで初めて利賀に来て、SCOTに40日間滞在し、スズキ・トレーニング・メソッドを体験した。メソッドについては本で読んで知っていたが、実際に体験してみると読んだ知識以上に素晴らしいものであることが理解できたという。それ以降、鈴木忠志氏との関係を継続している。メソッドそのものは、2002年にインドネシアの劇団、シアター・ガラシのアーティストが利賀でメソッドを学び、帰国して教えるようになってはいたが、2015年以降、ようやく本格的にメソッドが教えられることになった。今回のプロデューサーのレスツ氏がメソッドの本質を理解してインドネシアでしっかりと教えられるような体制を、氏が主宰するプルナティの持つスペース等を使って作られていったが、バンバン氏は自身が主宰する劇団チブタット(ジャカルタ)でも、メソッドを使うようになった。

バンバン氏によれば、インドネシアでは、それぞれの劇団が独自の俳優訓練法をやっており、システム化されたものはこれまで大学以外では教えられていなかった。スズキ・トレーニング・メソッドは、システム化されているだけでなく、実際にやってみると、これが俳優にとってよいことが誰にでもすぐ理解されるから、インドネシアで広まったのではないかと考えている。メソッドにおける集中の仕方、体の使い方のそれぞれが、インドネシアの俳優には無理なく自然に理解されるもので、誰でもが、これがよい俳優になるために必要なメソッドであることが理解できるというのである。

アンディニ氏は、2018年、ロバート・ウィルソン作品に出演する機会があり、

その出演のために、バンバン氏だけでなく、『ディオニュソス』に出演したインドネシア人俳優たちからスズキ・トレーニング・メソッドの訓練を受けた。そのときからメソッドに興味を持ち、2020年夏の利賀で開催予定だったサマースクールに参加しようとしたが、残念ながら、コロナ禍で中止となった。2021年になって、今度は『エレクトラ』のオーディションがあるというので参加、採用されたということである。アンディニ氏は2005年からシアターコマという劇団に参加しているが、そこはいわゆる台詞劇中心の身体性を必ずしも重視しない劇団である。スズキ・トレーニング・メソッドを経験して、やはり身体感覚を訓練しないときちり台詞が話せないということに気づくに至った。だから、できるだけ訓練をこれからも続けていくつもりである、とのことであった。

『ディオニュソス』に出演し、主役のカドモスを演じたジャマルディン氏のスズキ・トレーニング・メソッドとの出会いは古く、1994年のオーストラリアにおいてであったという。そのときには、スズキ・トレーニング・メソッドとは名乗っていない、オーストラリア人がやっているものだったのだが、ジャマルディン氏は興味を持って調べたところ、それがスズキ・トレーニング・メソッドであることがわかった。氏はインドネシアを代表する劇団のシアター・ガラシに1997年から2011年まで所属し、そこでもまた、スズキ・トレーニング・メソッドを経験する機会があった。そこで理解したのは、俳優にとっての必要な身体性というものを獲得するためのメソッドであることだった。身体ができていないと、舞台上立っても、観客に何も伝わらない。メソッドを通して、身体感覚を鍛えることで、そうした身体を獲得することが可能になると氏は考えている。

ジャマルディン氏によると、インドネシアでなぜスズキ・トレーニング・メソッドが普及したかという点については、バンバン氏同様、俳優の身体が必要とすることを獲得できる道筋を、わかりやすく示す方法であるからだと思うと語ってくれた。今回『エレクトラ』に出演することで、ある意味、「ほんものの」スズキ・トレーニング・メソッドを体験できているようにも感じていて、大変貴重な機会だと思っているということであった。

その後、筆者は、スズキ・トレーニング・メソッドがインドネシアの俳優にとって重要だと考えていることはよくわかったが、具体的な作品に出ることについては、どうかと聞いてみた。

バンバン氏によると、訓練でやったことがそのまま舞台上で生かされていて、それはたとえば鈴木氏の演出を受けるときに、きちりと身体的に応答できるということに示されていると思うとのことであった。つまり、やはり訓練と舞台は地続きであるのだ。しかし氏はさらに、同時代の世界におけるさまざまな悲劇的状况を人びとに伝えるためには、鈴木氏の演出とスズキ・トレーニング・メソッドの組み合わせが最もふさわしいのではないかと、今回『エレクトラ』に出演して、よく理解できたとも語ってくれた。

同じ質問にアンディニ氏は、今回エレクトラ役を演じているため、スズキ・トレーニング・メソッドにおける体の動きから、呼吸、集中、といった要素が、きわめて重要な役割を果たしていることを経験しているという。インドネシアの現代劇は、情緒に頼る演技が優先される傾向にあるが、スズキ・トレーニング・メソッドによる演劇は、体のフォームを崩さずに、感情を伝えることが重要であり、それが次第にできるようになってきたと思っているそうである。

ジャマルディン氏にとってのスズキ・トレーニング・メソッドは、最初は体かなりの負担がかかってきつい経験だったのだが、訓練を続けていくと、実際に舞台上立ったときに、体が強くなっており、また、体のバランス感覚も研ぎ澄まされるので、たとえ何も話さないような場面においても、体の強さを維持することができるようになるという。体が演技になっているのである。

最後に、コロナ禍における国際共同制作ということもあり、何が一番大変だったかという質問を試みた。バンバン氏によれば、インドネシアでは、感染が広まるとロックダウンになってしまうという危機的な状況にあり、2年近く、それまでできていた集団による作業ができなくなってしまうという。

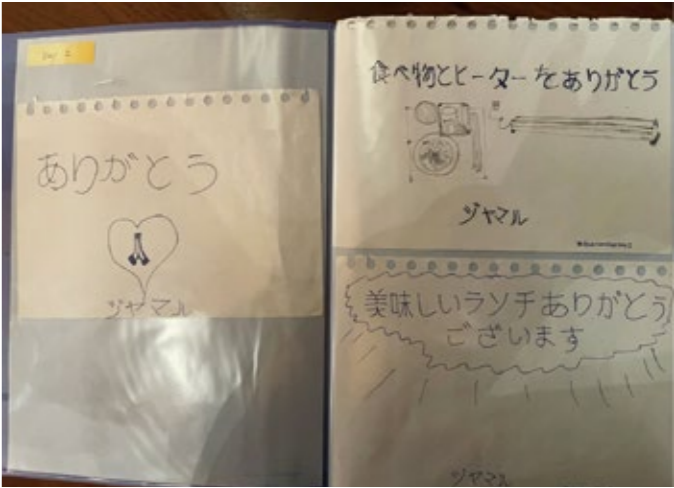
氏は人と人が直接会うことが大事だと考えており、演劇においてもやはり、人と人が集まって話し、そこで新しいアイデアが生まれるのだが、オンラインではその可能性はきわめて低いことを経験したそうである。今回のプロジェクトで、2年前同様の、物理的に交流をして何かを作るという機会を与えられたことに感謝しているとのことであった。

アンディニ氏もまた、ふつうに観客の前で演技ができるということに感動すらしていると応えてくれた。ただ大変だったのは、当初14日間の隔離期間があり、その間、トレーニングができなかったことである。来日前に、インドネシアでトレーニングを続けてきただけに、隔離期間明けには、トレーニングをやること自体が大変になってしまっていたが、周囲の応援もあって、なんとか舞台上立てる体になってきたとのことであった。

ジャマルディン氏は、コロナ禍の危機的状況のなかで、今回の国際共同制作で『エレクトラ』という新たな作品が誕生することは非常に重要なことだと思うと語ってくれた。観客がいるということが、何ととっても、この状況下でかけがえのないことだというのである。氏にとってもまた、14日間の隔離は大変ではあったが、この隔離期間中に添付資料にあるようなデッサンのような作品を描いて、スタッフとデッサンを通して交流するといったような、興味深い経験もしていた。

以上が、インタビューの内容である。スズキ・トレーニング・メソッドは世界的に広がっているわけだが、インドネシアの俳優たちが、それが自分たちに一番あっていると感じていることが何より興味深い事実であった。この後、通し稽古から本番まで立ち会うことになるのだが、短い期間でこのレベルまで達したことに誰しもが驚くような俳優の演技がそこにはあった。来日前から本公演を目指して訓練を積み、隔離期間を経て、鈴木氏の物理的な眼がある場所での稽古といった、極度の緊張を強いられるような場面の連続であったことが、俳優たちの演技が高いレベルに到達したことの大きな要因ではあろうが、そもそもインドネシア人俳優の演劇についての方法論や美学にとって、あるいは、その身体性にとって、スズキ・トレーニング・メソッドがきわめて相性のよい訓練方法であったということも、関係しているように思われるのである。

このことを含めた、『エレクトラ』の上演そのものについては、次回の報告書で詳述する予定である。



ジャマルディン氏の自己隔離期間中のノートから(撮影：筆者)